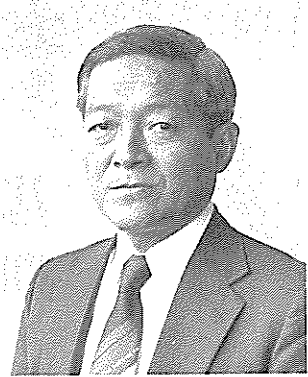


先端基礎研究センター長
伊達 宗行

基礎科学ノート 発刊まで



基礎科学ノートを出そう、という構想はセンター発足後、日ならずして話題となった。当センターの実質的な運営を論ずるセンター会議の席においてである。この会議は、センター長、次長、基礎研究推進室長、および各研究グループのリーダーで構成されている。この場に出された意見を集約するとつぎのようになる。基礎研究は多彩で多岐にわたり、センター内でもお互いが何をねらって何をやっているのか、そしてまたどんな最新情報を持っているのかわからない。これでは困る。また原研が基礎研究を集中的に行う組織を作ったことが世の中に広く知られていない。基礎研究こそ世界的な情報交換と人的交流を必要とする典型的な場ではないか。正規の論文、あるいは報告書が世に出て行く、というだけではなく、もっと身近に親しめるPR誌を持ち、一見難しそうな基礎科学をやさしく、かつ核心部を集中的にまとめて内外に知ってもらうことにしたらどうか。そして単に小論文ばかりではなく、短信あり、エッセーあり、空想があってもよからう。また、このようなPR誌は単に当センターのためばかりではなく、原研で広くかつ組織的に進められている各研究における基礎的研究を紹介する場にもなってもよいのではないか。また一方では原研を訪れる国内、国外の研究者も数多いから、この方々に率直な御意見をいただいて基礎研究の更なる発展をはかるのも大切である。いづれにも私は全く同感であった。ついでにその時の個人的な連想をつけ加えれば、今世紀初頭、オランダのライデン大学で世界初の液体ヘリウムが作られてまもなく発刊されたLeiden Communicationという情報誌が世界の低温科学をリードしたこと、そして今世紀中葉、B. S. T. J. と略される米国ベル研の小技術誌がトランジスター開発の後光まぶしく世界を魅了したこと、である。これらの歴史に一気に及ぶべくもないが、少なくともそのような気概を持った第一歩を踏み出したものと考えている。21世紀における原子力科学技術は、単に専門家のものだけではなく、少し大げさかもしれないが、人類の叡知を集約する形で進むことになるであろうと予想される。その学問の多彩さと社会的重要性が社会との相互作用を今日の想像もつかぬ程に多角化、複雑化すると推定されるからである。このような時の一灯として基礎科学ノートが書き継がれ、読まれつづけられることを期待している。